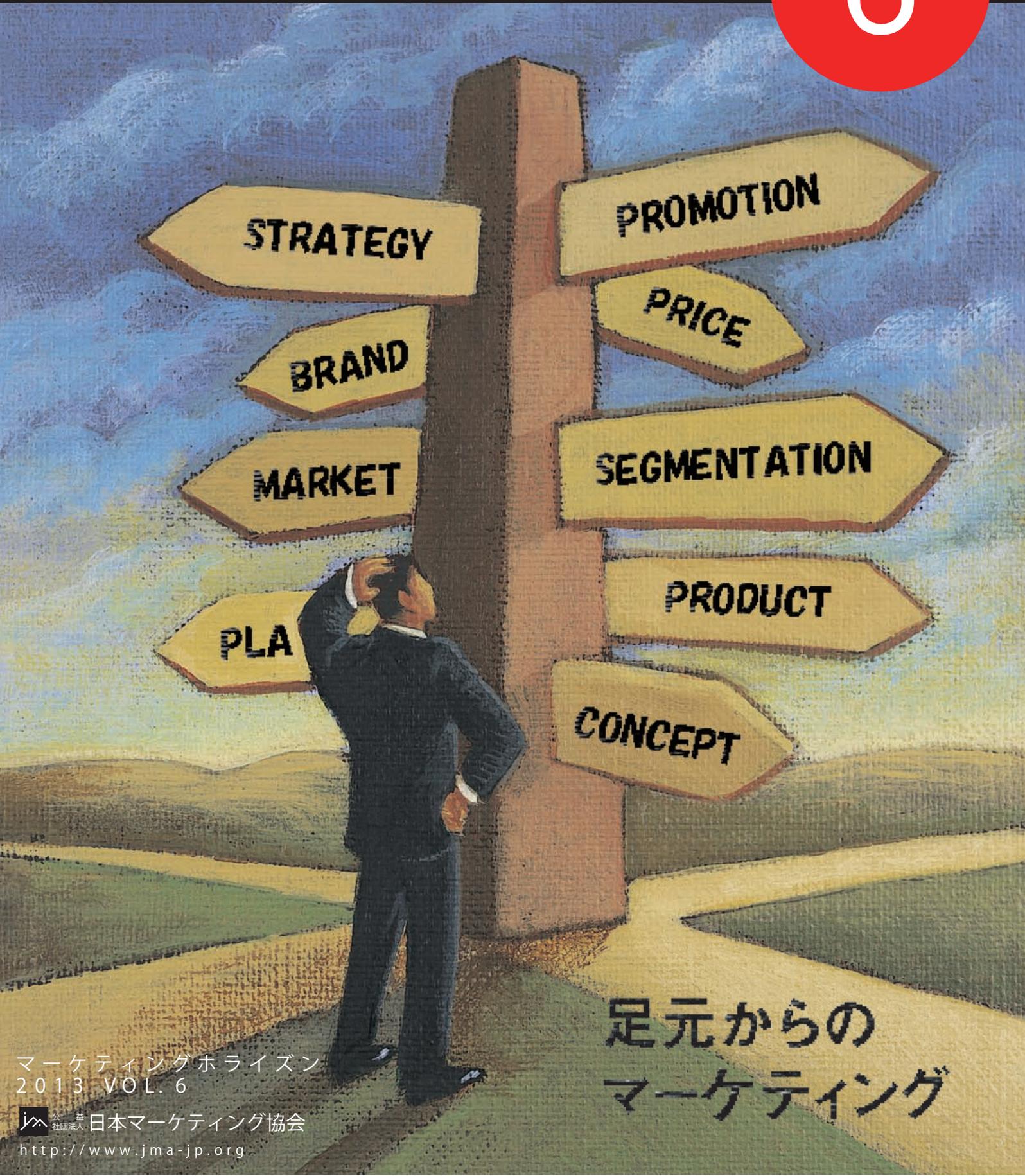


MARKETING horizon

— 今を見つめる。未来を描く。

6



足元からの
マーケティング

マーケティングホライズン
2013 VOL. 6

公益社団法人 日本マーケティング協会

<http://www.jma-jp.org>

MARKETING HORIZON

June 2013

特集： 現実を 直視する

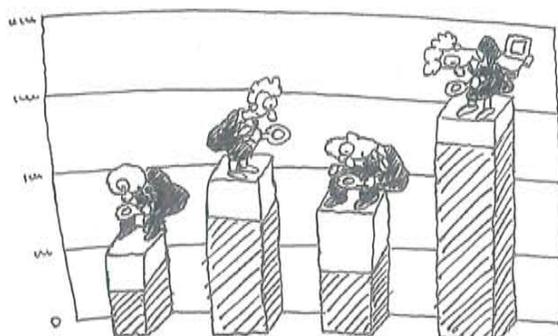


イラスト 小田桐 昭

Alcivac Design

CONTENTS

TOP INTERVIEW

ゴーハイ!気仙沼

宮城県 気仙沼市長 菅原 茂 3

常に半歩先立つ進歩性

高千穂大学 理事長 藤井 耐 8

SPECIAL FOCUS

ビジネスモデルのイノベーション

ネスレ日本株式会社 代表取締役社長 兼 CEO

高岡 浩三

ネスレ日本株式会社 飲料事業本部 ネスカフェアンバサダービジネスグループ

ネスカフェアンバサダービジネスユニット シニアマーケティングスペシャリスト

津田 匡保

..... 12

FEATURE

“企業会計”の現実 マーケティングに会計マインドを・・・ — 高橋 弘 17

“エネルギー”の現実 エネルギーの社会的価値基準の変化 — 中塚 千恵 18

“新興市場”の現実 成長するロシアへのジャパン・ブランド進出 — 福田 博 20

“理想”の現実 激動期のリアリスト — 中島 聡 24

“飲食市場”の現実 街をマーケティングする、から始まる店づくり — 入川 秀人 25

★MARKETING NEWSトピックス★ 28

ADVERTISING 電通マーケティングインサイト

MRMのすすめ

意思決定のための市場情報マネジメント 30

MARKETING EYES

女性マーケターの眼/クリエイターの眼 32

BOOKS

『思い込みを捨てれば10倍売れる』

『ビジョナリー・マーケティング』 33

常に半歩先立つ進歩性

近年、一部の私立大学においては、入学生減少の影響を受け、財政悪化に陥っている大学が増加傾向にある。そのような厳しい環境下にあつて、地に足をついた安定経営をしている大学がある。

今回ご紹介する高千穂大学である。

高千穂大学には、現在第6期（2010年から2014年）となる中期計画があり、第1次計画は約30年前、1980年に遡る。中期計画マネジメントの日本で最初の大学の一つであることは間違いない。30年の歴史を持つ中期計画を軸に、特色ある「家族主義的教育共同体」を作り上げてきた背景には、常に時代の半歩先を読み、魅力ある大学づくりのために改善を推進するシステムと教職員の努力が息づいている。

逆風の中にある大学経営の中、先を見据えて着実に進んでいる高千穂大学には、企業経営として学ぶことも多いだろう。同大学理事長 藤井 耐氏にお話を伺った。

Interview 藤井 耐氏 高千穂大学 理事長・経営学部 教授

半歩先を見る

—— 今回のマーケティングホライズン6号のテーマが「現実を直視する」で、今、世の中で高い評価を受けている現象について、この背景に何があるのかを探ってみようということです。今回御校にぜひお話を伺いたいと思いましたが、御校は「常に半歩先の進歩性」ということを尊重されていて、大学の中でも高い評価を得ていらっしゃると思っております。現実を直視するという意味では、現在の大学の教育のあり方をふまえ、御校の特徴ある教育方法、理念、運営など伺いできればと思います。

783もの大学があるなか全入時代と言われ、大学もひとつの企業体、経営という観点から見ますと非常に大変な部分もあろうかと思えます。

藤井 高千穂大学は、1903年（明治36年）に開校した高千穂尋常小学校の開学に始まり、1914年（大正3年）現在の高千穂大学の前身である、私学としては我が国初めての高等商業学校 高千穂高等商業学校の開設以来、本年で学園創立110周年を迎えました。創立以来、理事会、教員、事務職員、同窓会、

父母会等が一体となり学生ひとりひとりを家族のように支えていく「家族主義的教育共同体」という学園文化に基づく教育に努め、現在では商学部・経営学部・人間科学部および大学院の3学部1研究科で構成されています。

おっしゃるように、現在、国公立783もの大学があり、今日では、進学率も同一年齢120万人の内、約50%の60万人が進学する時代になりました。我々団塊世代240万人の時代の大学進学率は11～12%でしたから、まさにエリート教育からマスプロ教育に移り、完全にユニバーサル化教育の段階を迎えたこととなります。また、約50年間にわたる大学の数をみてみますと、団塊世代の方々が大学に進学した時代はおよそ300大学、約20年後の平成元年には500大学、そして平成25年の今日は国公立783大学です。一方、この50年間にみる経済状況は、経済成長から経済成長の鈍化・市場成熟化へと大きく変化しました。市場成熟化において企業は大学生の就職を厳選化せざるを得ない。しかし、大学への進学率は伸び、同一年齢60万人もの大学生がいる。今日の大学生及び、大学は熾烈な競争状況におかれて



藤井 耐

ふじい・たえる

1949年12月1日生まれ。

1972年 高千穂商科大学卒業

1974年 明治大学大学院経営学研究科修了後、高千穂商科大学へ。以来、経営組織論、経営管理論を中心専門とし、大学院も担当

2001年より学長、2007年より理事長

いると言えます。このことは、今日ほど大学教育のあり方が問われている時代はなかったということの意味していることとなります。私はその教育の原点を創立者の建学の精神に求めております。そして、この建学の精神こそ歴史を超え、その時代その時代の学生に伝えていかなければならない学生の行動原理であるとも思います。

—— 建学の精神はどのようなものでしょうか。

藤井 同一年齢60万人の若者が大学生というユニバーサル化教育の今日、いかなる方法・内容にて教育を実践するのか。その指針こそが、建学の精神であり、私たち全教員、全事務員、そして学園の役員、皆同じ思いでございます。学風の指針である「常に半歩先だつて進歩性」とは、半歩のごとく、歩みを止めず努力を継続した人間は、社会や人間を客観的に分析する論理的能力が生まれ、さらに論理的能力が育まれるからこそ、自らを、又、社会の将来を展望する客観的な予見性を有することができるということの意味しております。

さらに、この建学の精神を実現化するための学生(人間)像として3つの学風目標「気概ある常識人」「偏らない自由人」「平和的国際人」があります。

「気概ある常識人」とは、人間の精神性を意味し

ています。精神性が強くなれば歩みは止まってしまう。「偏らない自由人」とは、常に冷静に客観的に中庸の思想を持って社会や人間を洞察しなさいという意味です。そして「平和的国際人」とは、己だけが、そして自分の組織や国だけ良ければ良いということではなく、自らが大切ならば同時に他者の立場・思いがわかる配慮、優しさを持てる人間になってくださいという意味です。「気概・精神性」「中庸の思想」「配慮・思いやり」のある人間性を学問研究を進める過程において醸成することが、高千穂学園創設者の想いだったのです。

—— 最近の学生の質についてはどのようにお考えですか。

藤井 受験勉強を乗り越え学問的意欲の高い学生たちもいますが、一方高学歴・低学力等の形容もごございますが、基礎学力も不十分、学問研究に対する意欲も弱い、将来を展望する意識もまだまだ薄いといった、若者たちも現実にはおります。さらに、今日の学生達は、その多くが兄弟姉妹の少ない家族構造の下、ご両親に大切に育てられた子供たちですから、人生80年・90年の時代においてこれからいかにして人生終焉まで生きていくことが望ましいのかというライフデザインを描くこともできず不安・苦悩

を抱えている若者も多くいるものと思います。誰かがサポート・アドバイスしてあげなければ、自分の立ち位置すらわからない、何をしたいのかもわからないという学生たちも多くいるものと思います。これこそが少子化・市場成熟化・ユニバーサル化された今日の大学生にみる実態であり、彼等自身も、そして大学も厳しい現状なのです。

—— いまお話をお伺いして、大学生に対して人間として生きていく力、足元を見て生きていく力をつけてあげるといのが大きな役割になったのですね。

藤井 学部生活の4年間において、学問研究を進めると同時に、いま自分に与えられている役割を真剣に遂行し生きていくことこそ、人間の最も美しい姿があるということ、学生たちと共に学びながら気付いてくれることを切望しております。

—— 一般的な企業のなかでよくいわれるのは、職責を全うするという言い方をしますが、まさにそういうことなのでしょうね。

藤井 その通りです。ところで私は、「組織と人間行動」を自らの研究分野としておりますが、授業の折にこのような話もいたします。「君達、学生たちから見ると、大学の理事長や教授は何の不安も苦勞もないだろうなと思っているかもしれませんね。全く違います。職場生活上の不安・苦悩は、いかなる職業、いかなるポジション、いかなる企業においても皆あるのです。大切なことは、その時々、自らに与えられた社会的役割・職務に真摯に取り組むということです。君達学生でみるならば、今ここに、学生として真剣に講義を受講しているということが重要なことであり、人はその姿に人間としての美しさを覚えるのです。その真摯な行為を人生の終焉をむかえるまで継続していくことこそが最も大切なのです。」と。これこそが川田先生の「半歩」という意味なのです。

魅力ある人間に

—— 御校の学生さんは流通業に多く就職されていますね。実行力がある等、大変高い評価を耳にします。社会に出るまでにどのように学生の資質を向上されているのでしょうか。

藤井 私は人間の具備すべき資質としては、「①知識・知恵」「②感情・優しさ」「③意志力」「④行動力」「⑤倫理」「⑥責任感」「⑦配慮」すなわち「知・情・意・行・倫・責・配」にみる7つの資質であり、この種の資質を醸成することこそが「生きる」ということに他ならないものと考えております。そして、この種の資質を具備されている方々が、それぞれの社会でそれぞれの組織で存在感を認知されている人間であると思います。人間が個人という側面と同時に組織的存在であることを考えるならば、私達人間は個人として又、社会的存在として要請されるこれ等7つの資質を着実に育てていかなければならないものと思います。本学の学生達もまさに、「常に半歩」たる学風の指針に唄われているこの種の資質を醸成するための努力を継続されているものと確信致しております。

—— よくわかります。常に半歩先立つ進歩性ということは、日々とにかく地に足をつけて努力していくということ。そうすることでバランスが取れていくのでしょうか。

藤井 少なくとも、人間個人を社会的存在という側面で捉えたときに知の醸成は個人の努力の側面ですが、それが醸成されることにより、同時に社会的存在として要請される資質、たとえば「他者への配慮」といった資質も具備されてくるのではないのでしょうか。まさに、7つの資質は相乗的相互補完関係にあるものと思います。

—— 私の高千穂学園に対する印象は実学の間という感覚があります。空理空論ではない、実学というのが生きる力を磨くことになるのでしょうか。

藤井 実学という定義が、理論と現実の融合として捉えられるならば、理論的クールな分析を展開しながら、現実をみると同時に、現実・現象を正確に捉えつつ客観的理論構築を進める研究態度であるということに他なりません。そして、この作業は、まさに研究者にも組織の実務家にも両者に要請される能力であると思います。理論と現実とを常にフィードバックしつつ、より精緻化された理論的思考力を育成することこそが研究職及び実務家、さらには人間それ自身に求められているのではないのでしょうか。

—— 建学の理念、指針、実現するために教育者側に

求められる資質はなんでしょうか。

藤井 言うまでもなく一つには私立大学（私立学校法人）である以上創設者の建学の精神を理解・受容し、自らの学内職務に従事すること。そして二つには、学生の親御さんの思いを自分の子どもへの思いと同一視して学生と接することが出来る人であると思います。

—— まさに家族主義的教育共同体、ファミリーということですね。

藤井 そうですね。家族主義的教育共同体なる学園文化は、この4年間における高千穂生活において、学生の自立的意識・行動及び・他者との共生的能力を理事会、教員、事務職員の方々を中心とするサポート・システムにより培っていく風土を意味しております。

—— 入学した時と卒業する時とでは大きな変化を遂げていると思います。

藤井 19歳から22歳の4年間ですから、大きな変化という言葉がはたして適切かどうかわかりませんが、ただ先ほど申し上げました「知・情・意・行・倫・責・配」の資質が、18歳で入学式を迎えた時と、4年間が過ぎて卒業する時とでは明らかにその成長の軌跡を検証することができます。

“気付かせる”

—— これからよりいっそう高千穂学園の魅力を高めていかれると思いますが、より魅力ある大学としていろいろな展望がおりかと思いがすが。

藤井 既に申し上げました通り、全国国公立783大学が存在し、かつユニバーサル化を迎えた大学教育において魅力ある大学作りという作業は簡単なことではありません。同時に、私たち団塊の世代が大学時代を過ごした昭和40年代以降、半世紀を経た今日においても明らかに偏差値構造（大学受験時における基礎学力）による大学間ピラミッド構造も存在しております。そしてこの構造が今後も大きく変化しないと仮定すれば、基礎学力の不十分な学生に対しては、それを補いつつ各大学の建学の精神に立脚した個性的学生の育成を進めていくことではないでしょうか。気付きを喚起し、社会的自立、経済的自

立、職業的自立ができる学生を育成したいと思えます。

—— よく言われることですが、未来を考えてそのために一生懸命やるというやり方もあるかと思いますが、逆に一步一步やっていくなかで未来が見えてくるという見方もありますね。

藤井 その通りですね。両者の視点が必要です。ただし、将来を展望することが困難であるとも言える今日の不確実性の時代では、後者の行動様式が必要なのではないかと考えます。長く明りの見えないトンネル、しかし、いつの日か明りの見える時がくる。明りが見えるためには今を大切に、5年、10年、30年・・・と半歩半歩歩み続けることではないでしょうか。そのことのできる学生であってほしいですね。教育を受ける機会が与えられるということは素晴らしいことです。それをいかに活かしていくのか。早期に気付き、継続的努力を実践（実行）して頂きたいものです。

—— まさに高千穂学園の一步一步という教育方針は素晴らしいと思います。本日は有難うございました。

（インタビュアー：中島 聡 本誌編集委員）